俺みだいな欲たかれだ兄えでしゃ、嫁もらう時になって、なんにももの食わねで、稼ぐ人ほしなど思ったど。そしたば、ええ嫁が来たもんだけでおんな。

「なんにも食わねで、働ぐがら」

どて、来たんしけど。それだばええどて、家さおいだば、やっぱり、ものば食うどこ見せながったごとしゃ。んだども、婿あたいした気付けだごとしゃ。なんでも、米こんくりやある勘定だども、米ア思ったよりなぐなるど思ってな。こりゃ、なんとも不思議だもんだと思って、梁の上さあがって見るごとにしたど。

こんだア、婿さんえなぐなったら、その嫁あ、大っきな鍋さ米といで、まんま炊ぐもんだしけど。まんま出来だば、誰か入くるのだべかと婿思ったども、誰も来そうでねがったど。こんだ、そのまんまで、がらっとにぎりまんまにぎって、並べだんしけど。大っきい鍋さ五～六升も炊いだもんだものね、たいしたもんであったべあ。そしたばしゃ、わ（自分）の髪どさっとふるげだば、頭の上に大っきた口あって、歯がらっとおいでいるもんだしけど、その口さ、ずぼっ、ずぼっと、にぎりまんま入れでやるしけど。みんなそのにぎりまんま入れだば、まだ、ひょいっと髪結って、ずらっとしているもんだしけど。

「なんとこれだものな。これだば、わも食われるんだが、わがらねェ」

って、その婿あ、逃げだしたど。どんどんどんど、逃げて行ったずおんの。したばしゃ、向こうから六部来たんしけど。

どて、逃げてえったど。ショウブとヨゴミさ、さわられねエ鬼だもんだしけど。その婿、その中さかぐれて、助かったど。それでこんだ、ショウブとヨゴミいっぺエ持ってきて、家の入り口、入り口みんなさ、さしたもんだしけど。それでもっていまも、五月の節句にヨゴミとショウブどさすの、それだしど。

「実はこういうもんで、なんとしたらええしべェ。なんどが、俺どこかぐまってたんひじゃ」

って、そう六部さ頼んだばよ、

「ほらほら、そごの沼のはだに、ヨモギがらショウブがらいっぱい生えでるがら、その中さかぐれでれ」

ど、その六部言うんしけど。それがら、そごさかくれでえだしけど。そしたば、その嫁あ、髪ふり乱して、ぼってきたでおんのた。

「なんだごどされっべェ」

ど思って、婿あ黙ってかくれでだば、

「いまごさ、こういう男来なかったべが」

ど、六部さ聞ぐど。

「来たけェ。来たけェ」

と、六部そう言うんしずおんの。

「どごさ行ったべェ」

「それだば、わがらねしな」

と、知らねふりして、その六部あ、通り抜けだしごとねェ。そしたばしゃ、

「ここの中に人間のかまりある」

どて、ショウブとヨゴミのなが見るども

「ああ、なさげねェ。えるの見えるども、これささわれば、俺あくされでしまう。ああ、なさげねェ、なさげねェ、食うばずしてしまった」